（８）ハウストマトの空洞果発生防止対策

道南農業試験場園芸科

道内には、ハウス栽培されているトマトが約80ha、5,400トンあり、道民の多様な需要に応えて、新鮮な物を供給していろ。

ところがこのハウス栽培されているトマトには、空洞果と呼ばれる不良果が多く発生し、甚しい場合には収穫果の30%が出荷できずに、捨てられるようなこともある。このような無駄をなくすために、この試験では発生防止対策について検討した。

.試験の結果、まず、発生を少なくする栽培環境として、育苗中は密植を避け、第1花が開花を始めた程度の苗を定植し、本圃でも密植を避け土の水分は中庸（pF2.3灌水)に管理し、初期生育はやや抑えて、かっ茎葉を生育の後期まで健全に保つことが必要であった。次に、トマトの栽培では、着果及び肥大を促がすために生長調節剤が一般的に使われているが、その処理法を詳細に検討したところ、処理に当っては濃度を正しく守り、１花房１回の噴霧処理とし、高温(30℃以上)にしないこと、ジベレリンを抑制栽培では10ppm複用又は混用、促成栽培では5～10PPm混用することにより空洞果の発生を、トマトトーン単用に比べて1/3に減少した。また、生長調節剤を使用せず、多少労力がかかる難点はあるが、毎日～3日毎に開花中の花をバイブレータで振動して授粉を促してやると、種子数が増加し、果実が充実して、空洞果の発生を、トマトトーン単用に比べて1/4に減少して、正常果収量を増加した。

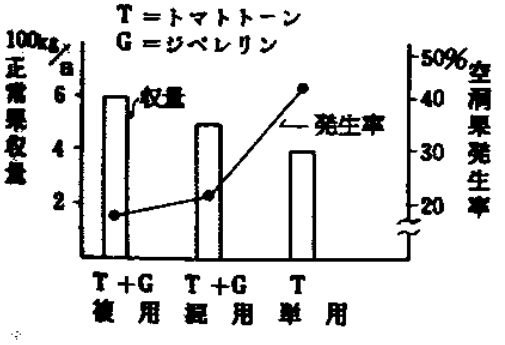

図１．生育調節剤の処理方法と効果

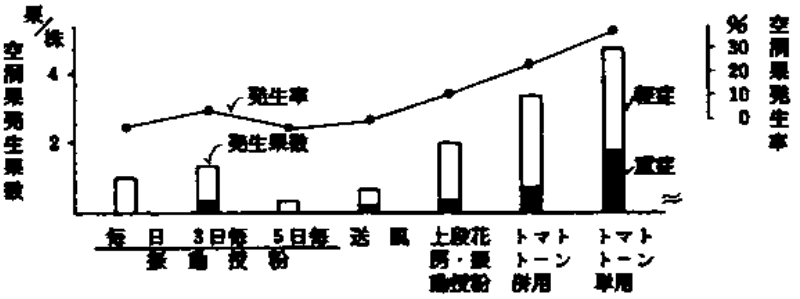

図２．振動受粉方法と効果

1） 空洞果とは、生理的な異常により果実の皮の部分が過剰に発育したため、ゼリー状の部分（種子を保護している組織）が果実を満たしきれずに、ピーマンの様になっている果実である。

2） ｐFとは、土壌水分張力を計る単位であり、土壌中の水分状態を表示するものである。ｐF　2.3は中程度の湿り状態である。

3） 複用とは、まずジベレリンを２～３花開花時に処理し、その２～３日後にトマトトーンを処理する用法である。

4） 混用とは、ジベレリンとトマトトーンを混合して同時に処理する用法である。

目次に戻る